

磐城高校とは その4

男子校時代から共学校に本当になるためには、本校卒業生で教員になった卒業生の中で女子教員がこぞって本校に赴任する時代になると、本校生徒たちも男子校時代への引け目も感じる事なく、本当の創造性が宿るようになるでしょう。

しかし、本校卒業生に、高校教員になっている者が、絶対的に少ないのも事実であり、絶対数が少ないので、今後の磐城の教育を考えると人こそ力であるので非常に心もとないのであります。

今、高校の校長81人中磐城高校の同窓生は11名であらう。さらには、40代後半から50代前半にかけて、県教育委員会を経験するものが増えてきており、今後、管理職は、磐城高校卒業生がある程度の数を保つことは間違いありません。

しかし、この10年の中で、高校教員になるものの絶対数が少なく、その中でも磐城高校卒業生は、毎年数人であることから危機感を強く感じていたのです。この構造を打破しないととんでもない時代がやってくると思います。

この学校に赴任してから、まず、教員志望生徒を増やすことが喫緊の課題と考えました。そして、教育実習の数も増やすことができれば、いわきの今後の教育を担うものの数を維持し、増大できるはずです。

さらに、今後は、高校教員の大量退職時代を迎え、定年延長や再任用等があるとしても、高校教員の採用数は増えていくはずであり、このチャンスに高校教員を志願していく生徒を増やすことがまず大事なことであります。

その意味で、地域とのかかわりを増やし、いわきの状況を高校時代から詳しく知ることができる総合的な探究の時間の充実を目指してきました。商工会議所で立ち上げた「いわきアカデミア」と共同し、いわきの震災体験をつなぐこと、いわきの様々な企業を訪問すること、を目的に、1年生は、総合的な探究の時間を利用して、各企業から出された課題（今後の集客を継続するためにはどのような手立てが必要か、いわきに産業を集約するためには、どのような手立てがあるか、いわきにおける医療従事者の確保にはどのような方法があるかなどなど）に対して、正解のない答えをアクティブ・ラーニングの手法を取りながら、対話的に主体的にその課題を掘り下げ、タブレットを使ってプレゼンテーション資料を作り、企業の前で披露するという学習を展開しているのです。

この取り組みによって、やがて生徒たちがいわきに戻ってくる力になるだろうと考えます。震災以後、いかに人を呼ぶかが大きなカギなのです。